

クローデル大使の旅と異文化理解

井戸 桂子*

Understanding Japan through Travel: Paul Claudel, French Ambassador

Keiko IDO*

Abstract

Paul Claudel was French ambassador to Japan from 1921 to 1927. He traveled extensively, and was thus able to observe and understand much of Japanese culture and the lives of the people.

He made long official tours to western Japan several times a year while he was stationed in this country; visiting Kyoto, Osaka, Kobe, the Setonaikai Sea and Kyushu.

Claudel liked to stay at the French embassy villa in Nikko Chūzenji not only in summer but also in spring and autumn, gaining there the inspiration to produce one of his major pieces of theatre '*le Soulier de satin*', his essays on Japan and his short poems.

He would also make short trips to Hakone or the Izu area, from which he could constantly admire the beauty of Mt. Fuji. His weekend excursions to locations around Tokyo such as Mito, Naritasan, Mt. Takao and Inokashira park also informed his appreciation of Japan.

Claudel's tours, trips, stays, excursions and walks allowed him to observe and appreciate not only celebrated or historical places and the fine arts, but also the ordinary people's daily lives and the workings of nature in an Asian country.

Claudel was a devout Catholic. The open vistas he found in the mountains and even from the top of Nagoya Castle were ideal settings for his spiritual contemplations. These bird's eye views added perspective to his understanding of the world and aided in his journey toward God.

Through these experiences he was to become one of Japan's most sympathetic and knowledgeable foreign visitors. Claudel continued to support the Japanese people throughout his life.

はじめに～外交官クローデルと日本での旅～

第3章 旅の目的と行先

第1章 1898（明治31）年の旅行

第4章 眼差しによる異文化理解

第2章 1921（大正10）年からの大使時代の旅

*人文学部 国際文化学科

はじめに ～外交官クローデルと日本での旅～

20世紀フランスを代表する詩人で劇作家のポール・クローデル（1868-1955）は、22歳のとき外交官試験に首席で合格した有能な外交官であった。

在外経験は在米勤務を最初として、中国、チェコスロバキア、ドイツ、ブラジル、デンマークなど、多岐にわたっていた。そして1921（大正10）年11月に駐日大使として来日し、1927（昭和2）年2月に大正天皇の大喪儀に参列の後、駐米フランス大使就任のために横浜港を立ち、サン・フランシスコへ向かった。

大使であり文学者であるクローデルは、途中の本国休暇を除くと正味4年3か月の日本滞在でどのような功績を残したのであろうか。

商務部配属アタッシュで外交官キャリアをスタートしたクローデルは、通商分野を得意とし、駐日大使として日仏の協調精神に基づく相互利益をめざし、日仏経済交流を積極的に推し進めた。また、「詩人大使」と呼ばれた外交官らしく、東京に日仏会館、京都に関西日仏学館を創設し、日仏文化交流の礎を築いた。

一方、19歳からマラルメの火曜会に通い、外務省の一年目に戯曲『黄金の頭』を出版している詩人クローデルにとって、日本は「偉大な書物」¹⁾であった。戯曲の代表作『縞子の靴』は日本で執筆されたし、離日後のクローデルの劇には能の影響が見られた。日本で上梓した『四風帖』や『百扇帖』は、俳句や短歌に惹かれたごく短い詩を集めた詩集である。

大使クローデルが活躍したのは、大使館のある東京だけではない。公用で関西や九州に出かける。そして詩人クローデルがひもといたのは、日本の演劇や短詩だけではない。訪れた各地の風土、地形、人々に対しても、確かな眼を向けた。

すなわち、クローデルは、驚くほど旅をして

いる。大使館のある東京以外へ足を伸ばしている。北は仙台から南は鹿児島まで、そして韓国にも渡った。また夏の避暑や週末の散歩も楽しんだ。

クローデルはどこを訪問したのか。その目的は何だったのか。そしてお気に入りの場所はどこだったのか。

本稿では、クローデルの訪問先を、中国副領事時代の3週間の日本旅行と、大使時代の4年3か月の滞在期において明らかにしたい²⁾。そして、大使の旅と詩人の旅にはどのような特徴があり、彼の日本理解、すなわち異文化理解へとつながったかを考える。

第1章 1898（明治31）年の旅

クローデルが外交官の道を選んだ理由の一つは、西洋文明社会を抜け出すためであり、東洋への関心が高かったからに他ならない。なかでも、彫刻家の姉カミーユ・クローデルの感化により、日本は夢の対象であった³⁾。

最初の海外赴任地はアメリカのニューヨークそしてボストンであり、いったん帰国後、中国の上海に赴任する。赴任して3年後の1898年、ようやく初めての国外休暇旅行を楽しむことが出来ることとなった。行先は日本で、明治31年の5月から6月にかけての3週間にわたった。姉カミーユから聞き知った憧れの日本の土地を、二十代最後の日々に踏むことになった。

時系列に訪問先を記すと以下の通りとなる。（下線が訪問先の地）

1898年 明治31年

・5月27日長崎港到着の後、瀬戸内海、神戸港経由で、横浜上陸。

・列車の車窓から松林と富士山の夕景を見ながら東京へ。

・6月1日日光へ。東照宮の祭列・輪王寺・二

荒山神社・裏見の滝を見学。中禅寺へ向かうが悪天候のため坂の途中で引き返す。

・東京へ向かい、上野・日本橋界隈・築地本願寺を見学する。

・横浜、箱根宮ノ下、元箱根の神社、熱海を訪問。

・静岡を訪れ、臨在寺、静岡浅間神社で狩野派の龍に注目し、夜行列車で京都へ向かう。

・京都では、御所・北野天満宮・金閣寺・大徳寺・清水寺・方広寺・三十三間堂・博物館・東本願寺を一日目に、二日目に二条城・東寺・西本願寺・泉涌寺・孝明天皇陵・銀閣寺・南禅寺・芝居鑑賞という、意欲的な見学をこなす。

・神戸で明石の松林散策をしたのち、神戸を出港し、長崎に寄ったのち、6月22日上海に帰着した。

この初めての日本旅行は、すでに二十年後のクローデル大使時代の旅の特徴を、訪問先と観察眼の二点において予見させる。

まず訪問先では、日光を優先させていることである。クローデルは旅行に際してガイドブックを携行しており、そのアドバイスに基づいて横浜で上陸後、日光へ直行した。つまり、本書により6月2日に東照宮で祭礼があると知り、東京見物を後回しにして、出かけた⁴⁾。大使時代はかけがえの無い日々を日光で過ごす。

さらに訪問先としては、定番の京都だけでなく、静岡というやや目立たない観光先を選び、そこで寺社に詣でていることである。大使時代も、京都は何度も訪問するが、仙台、名古屋、静岡、尾道など瀬戸内海の町々にも足を伸ばす。

次に観察眼としては、地形に目を向けていることと、美術、ことに障壁画への関心である。日光へ向かう道すがら、むきだしの山巒を観察し、中国に戻ると散文詩『森の中の黄金の櫃』に神話世界へのアプローチの道として歌う。

美術も見逃さない。静岡浅間神社では、楼門の龍の彫刻と狩野派による八方睨みの龍の拝殿天井画を見上げ、京都では、二条城の金色の松の障壁画、西本願寺の松鶴図を鑑賞し、同寺の金碧に描かれた秋の図を日本で見た中で一番美しいと言って感動する。すなわち今回芸術として見たものが、東照宮を始め、桃山時代から江戸時代の絵画彫刻であり、それらに関心を寄せていたことがわかる。こうした地形への観察眼と美への関心は、のちに益々深まっていく。

第2章 大使時代、1921（大正10）年から1926（昭和2）年の旅

駐中国副領事時代の旅から23年後、1921（大正10）年の11月、クローデルは大使として日本へ赴任する。赴任にあたり日記に、「忍耐、省察、神とわたしの守護天使の存在を常に意識し感じること」⁵⁾と述べるように、大使としてまたカトリック信者として異文化日本と真摯に向き合うことを宣言したのである。

第1節 1921（大正10）年～日本への赴任の年～

11月

・11月19日の早朝、朝日を浴びながら海上より雪を冠した富士山を見たのち、横浜に上陸し、夕刻、大使館に到着。

12月

・12月中旬から下旬に、横浜商工会議所、暁星学園・浅草・帝劇を訪問。

この年は、赴任直後のため、泊りがけの旅はしていないものの、11月に芝公園、12月に浅草、帝劇での鑑賞など、週末は東京市内を楽しむ。

第2節 1922(大正11)年：2年目 ～大旅行として、2月ジョッフル元帥に京阪神随行。5月奈良・京都・大阪訪問。日光中禅寺滞在～

1月

・ジョッフル元帥と家族が20日に国賓で来日した。2月6日まで歓迎行事と午餐会、晚餐会が続く。

2月

・元帥に随行のため、夫人とともに、京都、大阪、神戸を初めて訪問する。

・元帥一行を神戸で見送ったのち、京都へ戻り、府庁・市役所表敬、明治天皇陵の公式参拝、京都帝国大学訪問という公式行事をこなす。加えて、喜多虎之助の案内のもと大徳寺で雪舟・牧谿を、真珠庵で狩野探幽を鑑賞した。修学院離宮・清水寺・東山名刹・黒谷(金戒光明寺)も訪れ、嵐山、亀山山麓、玉川楼、祇園中村楼に遊ぶ。

・東京市内では、二人の娘と隅田川、花やしきを楽しむ。

3月

・大宮(氷川神社)への車での訪問や、目黒から渋谷までの春霞の散策など、春を楽しむ。神社で鈴を鳴らし神を呼ぶ子供を見る。

4月

・井の頭公園に出かけたり、桜を見に大宮を散策したり、週末も行動的である。

・箱根、熱海、小田原、鎌倉、江の島への数日の旅行を楽しむ。

5月

・3日から二泊三日で、中禅寺のフランス大使館別荘を初めて訪れた。

・市内では、大相撲と菖蒲園の見学に。

・下旬、京都・奈良・大阪へ一週間の出張に赴く。奈良では、興福寺、東大寺、帝室博物館、法隆寺を訪れ、古い仏像に関心を抱く。京都で

は、京都帝国大学で講演を行い、三十三間堂・高台寺・京都御所・二条城・桂離宮・修学院離宮・金閣寺、西本願寺・東本願寺を訪れる。東本願寺の枳殻邸で、楽焼の皿に関心。鹿子木孟郎が皿に「鳥」を描く。大阪では大阪府庁、市役所、大阪城、四天王寺を訪れ、関西大学で講演。

7月

・鎌倉と江ノ島へ赴く。

・中禅寺湖畔に滞在し、ミヨー宛に「生活は麗しい」⁶⁾と語る。

8月

・中旬、再び中禅寺湖畔へ行き、男体山を登山し、二荒山神社中宮祠で祈禱を受ける。夏期大学で学生を前に講演「日本の伝統とフランスの伝統」(のちにエッセイ「日本人の心を訪れる眼差し」として刊行)。

9月

・中禅寺から足尾の山地まで足を伸ばし、中旬に東京に戻る。

10月

・中旬、日光東照宮の秋の例大祭を見学し、塩原へも。

・青梅へドライブし、青空に映える鈴なりの柿の実に目を留める。

11月

・箱根、宮ノ下を散策し、長尾峠からの富士山の美しさに感動。

12月

・高尾山に登ったり、熱海を散策したりと、冬の週末を楽しむ。

2年目の1922年、クローデルはジョッフル元帥に随行し、また京都と日光というお気に入りの訪問地を得た。

着任してまだ2か月しか経っていない1月末に、クローデルは国賓として来日するジョッフル元

帥を接遇しなければならないこととなった。元帥に随行して関西を訪れ、神戸港で一行を見送ったのちは、赴任後最初の京都訪問をする。この京都には5月にも訪れ、枳殻邸の園遊会で洋画家鹿子木孟郎がクロードの名前にちなんで「黒鳥（くろどり）」を描き、これがこの日本名を使うゆえんとなったと言われる。また、京都と大阪の大学にてフランス語について講演を行うのも、クロードらしい旅程である。

日光の中禅寺別荘を気に入り、その別荘生活を謳歌し始めたのも、さらに、箱根まで気軽に一泊二日の小旅行を実行しだしたのも、この年からである。

日光は、まぶしい緑の5月、登山と避暑の夏、紅葉の10月と三回訪問した。着任後半年を超えた6月には、神父宛てに、ひどく困難な生活を送っているの、神にとりついでほしいと吐露し、精神的に苦しんでいた。しかし中禅寺に滞在してからは落ち着きを得て、7月中旬には、毎朝無上の喜びをもって一時間祈ることができるまでに回復し、ミヨーに宛てて湖畔の素晴らしさを語った。

箱根では、周辺から富士山を見て感動している。

第3節 1923（大正12）年：3年目 ～4月 京都・大阪・奈良を一人で訪問。夏、中禅寺滞在。9月1日関東大震災で被災。11月末から12月初め関西・名古屋・静岡を訪問～

1月

- ・成田山新勝寺へ詣でる。
- ・中旬、厳冬の日光と中禅寺湖で、凍てつく森を巨大なクリスタルの総体とみる。
- ・東京では、歌舞伎、能、相撲を見物する。

3月

歌舞伎俳優福助による、自らの劇『女と影』上

演の準備に忙しい。これは「大成功」を収めた⁷⁾。

4月

- ・箱根、宮ノ下で満開の桜を楽しむ。
- ・中旬、一人で京都へ出発。嵐山の富田溪仙宅で自作の挿絵の打合せをしたのち、大覚寺宸殿の紅梅図と正寝殿の雪の間の襖絵に感動。
- ・続いて神戸へ向かい、日仏協会、知事、市長、フランス語学校を訪問する。
- ・大阪では高校で講演、教会や女学校を訪問の後、奈良を経て吉野で観桜し、美観は言語に絶すると見るが雑踏にへきえきした。奈良公園、東大寺大仏殿を訪ね、二月堂で護摩を焚くところを見る。

5月・6月

- ・5月中旬から6月上旬まで、保養のため中禅寺へ。つつじに感動。

7月

- ・上旬、家族で中禅寺に滞在。雨が続き、「水の中の森」と記す⁸⁾。
- ・箱根、宮ノ下や千葉の海浜にも行く。

8月

記録は大震災の際に焼失したが、中禅寺別荘滞在の可能性が高い。

9月

- ・1日（土）、12時に激しい地震。
- ・返子で再会した長女マリを抱きしめた時、遙か空の「孤独で平穏な富士の姿」⁹⁾を見上げる。
- ・大使館・公邸ともに焼失したので、中禅寺にしばらく滞在。
- ・子供たちを帰国させ、大使夫妻は帝国ホテルで仮住まいを始める。

10月

- ・中旬、中禅寺へ。湯元を訪れる。

11月・12月

- ・11月29日から二週間、京都・阪神・名古屋・静岡の商工視察へ出張。
- ・大阪で勲章授与や染料工場を視察した後、週

末は京都へ赴き、火曜から再び大阪・神戸で公務をこなす。叙勲や川崎造船所・三菱造船所の視察を行う。

・名古屋では、県庁・市役所・名古屋離宮を訪れ、日本製陶会社・鈴木ヴァイオリン・岡本自転車を視察した。

・帰路、静岡に寄り、久能山東照宮では、急な階段をのぼり、黒い漆塗りの本殿に辿りつくと、「鷹の巢」¹⁰⁾を連想した。三保松原では、羽衣伝説に関心をもつ。静岡では不二高等女学校を訪問し帰京。

3年目の1923（大正12）年は、3月末に戯曲『女と影』を歌舞伎役者の福助が帝劇で初演するという喜ばしい春から始まった。しかし9月1日関東大震災で罹災し、大使館再建と日本への援助という二つの大きな責務に取り組んだ。

旅に関して言えば、日光と関西が主な旅先である。日光へは誠に頻繁に出かけた。

関西方面は二度、出かけた。4月に京都・神戸・奈良・吉野を巡る。叙勲などの公務を忙しくこなし、一方で画家の富田溪仙と知己を得て、大覚寺の障壁画に植物を通して神性を表現する日本の画家を発見するなど、公私ともに充実した旅となった。罹災後も、12月、日仏の経済相互発展のために、神戸・大阪・名古屋・静岡を訪問し、工場・造船所等を視察した。しかし週末は私的な旅をする。すなわち、最初の土日は大阪から京都に回り修学院離宮や観劇で過ごすし、次の土日は名古屋から静岡まで来て、海際の道路から、久能山東照宮の急で長い「ジグザグ階段」¹⁰⁾を登り黒塗りの本殿で拝し、三保松原では羽衣伝説に思いを馳せる。なお、名古屋では名古屋離宮（現名古屋城）の当時存在した天守閣に登ったことも、彼が高所からの俯瞰を好むことを示し、特筆に値する。なぜなら、日本で執筆した代表作『繻子の靴』では、主人

公ロドリグに名古屋城天守閣の格子窓から平野を俯瞰させて、ロドリグが世界を掌握した場面となるからである¹¹⁾。

第4節 1924（大正13）年：4年目～5月
メルラン総督訪日のため中禅寺・大阪・京都・神戸・宮島・釜山へ随行。7月富士登山。11月九州地方視察～

1月

- ・新年は九段の能楽堂での「翁」鑑賞から始まる。
- ・御殿場のレゼー神父のハンセン病療養所で超自然的雰囲気に触れる。

3月

- ・水戸の偕楽園で、一本一本が個性的な梅に感嘆し、また好文亭三階の楽寿楼に登り、展望を楽しむ。
- ・沼津から車で三津へのドライブは収穫が続いた。リヴィエラ海岸を思い出し、二つの島の間から姿をのぞかせる大きな富士山に感嘆し、海辺で嫁と姑の、素朴な風情に感動した。

4月

- ・車で箱根宮ノ下へ行き、桜、桃、菜の花を見る。

5月

- ・メルラン総督一行を出迎え、9日の摂政の宮拝謁から15日まで、東京・横浜での歓迎会・視察つづく。
- ・二泊三日で一行と共に日光へ。寺社参拝し、中禅寺では湖上遊覧を楽しむ。
- ・大阪では、大阪城、天王寺、道頓堀、フランス美術展を見学。
- ・京都では、長楽館・伏見桃山御陵・西園寺の邸宅・京都帝大・喜多骨董店・保津川下り・和楽庵茶会を案内。
- ・神戸訪問の後、ジュール・フェリー号に乗艦

し、宮島へ向かう。

・巖島神社に参拝し「戦いの舞」を鑑賞したのち、ジュール・フェリー号にて釜山へ。29日のソウルまで随行し、見送る。

・30日下関から列車で瀬戸内海沿いに東京に向かうとき、風景に感銘。朝鮮との違いを感じる。

7月

・富士登山のためにポーランド公使パテックと、まず大月駅へ向かい、馬で五合目まで行き、一泊する。八合目まで登り、さらに一泊。6日の朝、山頂より燃え上がる巨大な地平線を見る。酷暑のなかを須走經由で下山。

・翌週末、宮ノ下で素晴らしい日を過ごす。

・19日から中禅寺の別荘に滞在

8月

・途中一度帰京するが、中禅寺滞在中。湯元から金精峠を超え、3つの湖を巡ることも。

・日光から仙台へ行き、雨の中、船で松島へ。東京への帰路の車窓に、広々とした景色を見晴るかす。

10月

・東京では、上野での音楽会や、日比谷公園での園遊会に参加。

・遠出は、伊香保へ行き、榛名湖・榛名神社を訪ねるほか、日光で紅葉を見物し、秋の花や、紅葉の森の奥にそびえる男体山に惹かれる。

11月

・上旬、パテックと富士すそ野の旅を楽しむ。河口湖、西湖、精進湖、本栖湖を徒歩・モーターボート・馬などで巡る。田原で一泊し、身延山久遠寺に詣でる。

・この頃のメモに、「眼差しのたった一瞥でくまなく世界のすべてを把握するには、地球を離れる必要がある。」と記す¹²⁾。

・中旬から奈良と九州への旅へ出発。奈良では正倉院御物を見学。

・神戸港より長崎へ向かう瀬戸内海で、丹青色

の水と真っ赤な夕陽に感動。

・長崎では、海星中学・大浦天主堂・浦上天主堂を訪問のほか、長崎司教、知事、在長崎フランス領事に会う。

・カトリック関連の訪問も担い、教会や病院も各地で訪ねる。

・博多へ行き、福岡市役所訪問、福岡大学での講演をこなして、大牟田の三井倶楽部へ。三池鉍染料工場・万田炭鉍を視察する。

・島原へ移動し、島原城址・雲仙仁田岳付近を散策し、その紅葉を称賛。

・車窓から、秋の太陽に映える田園風景を堪能しながら、鹿児島へ。県庁、市役所訪問だけでなく、西郷の墓に献花もする。桜島では、火山の中腹まで登り、溶岩の幻想的な形に感嘆した。

・別府では、市長の案内で地獄めぐりをした。別府港より、神戸港に向かい、三の宮駅から帰京。

12月

・日本工業倶楽部で日仏会館設立記念式典

4年目は、1924年の11月で満三年となる大使にとって、大震災を経ての集大成をせねばならず、念願の日仏会館設立を果たした。

行事としてまた旅として最も重要だったのが、インドシナ総督メルランが震災のお見舞いと摂政の宮の成婚を祝うために5月国賓として来日し、その随行をしたことである。

6月末には再建された大使館公邸に移り、長い帝国ホテルの仮住まいに終止符を打つ。そして7月に、これまで仰いでいただけの富士山を、最初で最後だが登った。山頂より燃え上がる巨大な地平線を見る。下山は暑いばかりで閉口した。

11月の九州行は大牟田の三井物産から勧められたというのが、炭鉍や工場などの商工業視察のほか、長崎におけるフランスカトリックの立場

の視察など、宗教上の立て直しも重要課題であった。大学での講演や学校視察もあった。もちろん、美しい紅葉を雲仙で見て、日本で一番美しい場所と愛で、車窓の秋の田園光景も気に入ったし、桜島では中腹まで登り溶岩を観察し、別府温泉の地獄めぐりを楽しむといった、クローデルらしい体験も重ねた。

9月に夫人も娘たちに続いて帰国したので、その分、週末の外出は増加したようである。音楽鑑賞、歌舞伎鑑賞、近郊や日光への小旅行を繰り返した。

第5節 1925（大正14）年：5年目 ～満3年を経て、休暇帰国へ～

1月

・京都へ発ち、竹内栖鳳の別邸霞中庵にて勲章を授与し、龍安寺の石庭・西芳寺の苔庭を見る。栖鳳と喜多虎之助と、すっぽん料理の昼食をとる。

・大阪でも商業会議所の送別会が開かれ、稲畑勝太郎の送別の辞に答え、現代日本を紹介するつもりであり、フランスと経済関係を樹立することを希望すると述べる。

・13日、日の出に染まるバラ色の鮮やかな富士山頂を眺める。この富士山のイメージで日本滞在の記録を締めくくり、「日本滞在終了」と記す¹³⁾。

・23日横浜港を出港。富士山はほとんど見えない。

滞日満3年を経て、休暇を得てフランスに一時帰国することになったが、気持ちの上では、「日本滞在終了」を意識しており、京都の私的な、また大阪での公の送別会でも、告別のつもりで臨む。やはり最後に告別をしに行くのは、京都と大阪であり、そこでの交友関係がいかに大切

であったかがわかる。また、車窓からの風景観察、とりわけ富士山への思いは尽きないことが日記に記されている。

第6節 1926（大正15）年：再来日1年目～日本へ帰着。5月バザン提督と関西へ、帰路に伊勢へ。7月エリオ元首相夫人を京都案内。夏は中禅寺。9月瀬戸内海沿岸へ・京阪神で関西日仏会館設立の協力要請～

2月

・2月27日横浜港に娘レーヌと到着。東京へ。

3月

・日本でこれから過ごす数か月を、隠遁と感じている。

・初めての郊外散策は、娘レーヌと高尾山へ。

4月

・三泊四日の熱海への旅。熱海と修善寺を散策し、桜の花と風光明媚な海辺の断崖の道に感嘆。

・4月末、バザン提督一行と横浜から宮島へ向かう。はじめ荒れた海を航行するが、素晴らしい天気の中、瀬戸内海を進み、宮島に到着。

5月

・バザン提督一行とは別れ、神戸にて川崎造船本社を視察。大阪で、大阪城・天王寺・文楽と歌舞伎鑑賞の後、奈良へ。神武天皇陵・薬師寺を訪れ、長谷寺では咲き誇っている牡丹に感動。

・続いて宇治山田経由で、伊勢神宮を訪ね、巨大な杉・神秘的な五十鈴川に感銘を受けるだけでなく、朝熊登山鉄道で山頂の金剛証寺も訪れる。二見浦では夫婦岩と早朝の海に強い印象を持つ。その後、名古屋にて、三菱内燃機会社、名古屋離宮を訪問。

・日光へ一泊二日滞在。

6月

・日光・中禅寺で、アザレアや桜、青や黄色の花菖蒲に感動。

・毎週末、能の鑑賞、大宮また葉山への散策に外出。

7月

・元首相エリオの夫人を娘レーヌと京都案内。知恩院・清水寺・二条城・桂離宮・三千院といった名所訪問だけでなく、琵琶湖を遊覧したり、日本画家・山元春挙の別邸で湖畔の篝火を眺める夕食を取ったり、嵐山の富田溪仙宅訪問のあと舟遊びをしたり、比叡山に登り延暦寺のほか琵琶湖の眺望を楽しんだり、クローデルらしい趣向をこらした行程であった。

・中禅寺へ行き、湯元温泉と湯の湖へのドライブ。

8月

・日光で避暑。白根山に登り、天空を仰ぎ、「神の驚くべき豊かさ」を感じ、「光を指の間に止めどなく流させる」¹⁴⁾。そして霧にかすむ中禅寺湖を見下ろす。

・日光から遠出し、車で伊香保へ向かう。途中、うっそうとした溪谷・咲き誇る花々・湖沼・溪流の水音・砲台のような火山の榛名山に目を留める。軽井沢での2泊3日を経て、浅間山の麓を通り、草津へ。

・日光から、金の鉱山である西沢金山へ。崖っぷちの道を通り、素晴らしい森林の光景に感服。
・護衛艦マルヌ号艦長ドーベ少佐を、月末から9月上旬まで、中禅寺に迎える。

9月

・マルヌ号に下田で乗船し、神戸港へ向かう。
・神戸川崎邸で牧谿を見たのち、岡山へ。この後、高松港から金毘羅宮を訪れたり、広島の糸崎港で下艦して列車に乗り換え尾道で千光寺・西国寺を訪問したり、尾道水上署の保安丸で屈指の名勝地、鞆の浦・仙酔島を巡ったりするなど、瀬戸内の対岸を往復する。

・糸崎港から別府へ。地獄めぐりをした後、宇佐神宮・耶馬溪・湯布院を訪れ、神戸港に戻る。

・艦長ドーベを伴い、大阪・京都へ。日仏協会主催の歓迎会と、関西日仏学館（現アンスティチュ・フランセ関西）建設を協議する会に出席し、日本側の援助を求めるためである。

10月

・富士五湖、箱根へ。富士山を「羽衣」の天女が衣の裾を長く引くようだと見る。

・娘レーヌと秩父溪谷へ、紅葉見物。

・日光と中禅寺へ出かけ、紅葉鑑賞。「太陽が休む馬小屋」¹⁵⁾を連想する。

11月

・藤田平太郎宅で茶会に招かれ、茶法に感慨。内的に浄化をし、自然との交換があるとみる。

12月

・1日、ワシントン転任の正式な知らせ。

・大阪と京都に向かい、日仏文化協会にて、新しい日仏学館設立のスピーチをする。喜多虎之助・竹内栖鳳・富田溪仙らと別れを惜しむ。

・東京に戻る車中から、雪に覆われた富士山を眺める。

・25日、日本国天皇崩御と記す。

休暇でフランスに戻っていたクローデル大使は、結局2月に、娘レーヌを伴って、再来日することとなった。「隠遁」のような消極的な思いで日本の地を再び踏む。しかし、その消極性はずっと続いたわけではない。日本に関する文章を依頼されて旅を重ねて執筆しているうちに、そして東京だけでなく関西にも新しい教育文化施設を設立しようという使命を持った故に、日本滞在の最後の一年となるこの年は、たいへん充実したものとなった。日本の生活を大いに楽しみ、友人の多い国と別れるのは残念と思う。

旅も驚くほどしている。大きな旅行から、日光行き、そして週末の外出まで頻繁に実行した。遠距離の行先は、5月、7月、9月の関西方面であるが、ことに5月と9月は、フランス海軍

の艦による旅であったため、関西に加えて、宮島、尾道、瀬戸内海、別府を巡る。

日光は避暑の基地的な意味を持ち、日光から軽井沢や榛名に足を伸ばす。夏だけでなく、春のつつじも秋の紅葉も楽しむ。もちろん別荘では落ち着いて執筆も進んだ。その他、熱海、箱根、高尾山などを週末に散策する。

さらに、関西日仏学館設立のために、場所の選定から関西財界への支援要請そして本国への報告と依頼まで、実に精力的に動いた。そこに駐アメリカ大使への発令が重なり、挨拶もかねて関西を訪問する必要性が出たのである。

12月、大正天皇が崩御され、その大喪儀に列席するために、大使の離日は翌1927（昭和2）年の2月まで延期されることとなった。

第7節 1927（昭和2）年：再赴任2年目 ～大喪儀参列、最後の旅は日光～

1月

・二泊三日で箱根宮ノ下へ。良い天気のもと、雪をいただいた富士山の姿に感動。金襴の織物と金色の漆器を購入。

・日光へ一泊二日の最後の滞在。素晴らしい天気だが厳しい寒さの中、中禅寺へ行き、男体山・溪流や滝に「最後の眼差し」¹⁶⁾を投げ、別れを告げる。

2月

・7日（月）19時30分より23時まで大正天皇の大喪儀に参列

・離任前日の16日は、昭和天皇の各国特命大使を招いての午餐会に出席し、ラジオを通じて別れの挨拶を行い、新橋演舞場で5代目福助による『本朝二十四孝』を鑑賞したのち、新喜楽でのインドシナ協会主催の送別会出席をもって終了する。

最後の年は、2月7日大正天皇の大喪儀への参列のための滞日延長であった。その時に訪問した先が、1月16日からの箱根宮ノ下と1月30日からの日光と中禅寺である。雪をいただいた富士山と、奥日光の男体山が、クロードルの眼差しを最後までひきつけていた。誠に彼の意図を象徴する二つの山である。

大喪儀に参列した各国特命大使への午餐会があった2月16日が滞在最後の日となり、翌17日、若槻首相・幣原外相・渋沢栄一・ドイツ大使らの見送りを受けて東京駅から横浜へ向かい、午後、「これあ丸」に乗船し、クロードル大使は次の赴任国アメリカに向かう。

第3章 旅の目的と行先

フランス大使クロードルは、滞日の4年余りに、第2章でみたように実に精力的に日本を旅して歩いた。

まず、その目的として挙げられるのは、やはり大使としての公的な旅である。年に2回から4回のペースで、関西方面を中心とした賓客随行と産業視察を行った。

1922年は、1月のジョッフル元帥の京阪訪問に随行、同年5月の京阪の知事表敬訪問。1923年は、4月の神戸表敬・大阪講演と京都・奈良・吉野行、同年9月の関東大震災被災を経て同年11月末、阪神・名古屋への商務視察。1924年は、5月の国賓メルラン総督一行への関西・ソウル随行、同年11月の九州方面、すなわち長崎のカトリック状況視察と各地の産業視察。これらが大きな公的な出張であった。母国休暇の後、再来日の1926年の1年間でも、5月のバザン提督随行と帰路の伊勢志摩への旅、同年7月の元首相エリオ夫人の京都案内、同年9月のマルヌ号に同乗しての瀬戸内海と別府への旅、そして同年12月関西への旅が続いた。

こうして国賓ならびに賓客随行、あるいはフ

ランス艦船への同乗が大使の最重要任務として優先された。ことにメルラン総督一行の訪日は別格であった。フランスにとって仏領インドシナは重要な位置にあり、駐日フランス大使もそれを鑑みる必要があるのだが、その総督がフランス国を代表して国賓として来日するわけであるから、クローデルにとって大きな行事であったといえよう。

もちろん産業視察あるいは叙勲なども主要な公務出張であった。産業視察は、アメリカやドイツに対抗して、フランスの産業、ことに造船や航空機などの技術を日本で定着させるために、喫緊の課題であった。再来日後は、関西に日仏学館創設のための基金募集の出張も増加した。勲章を授けに旅することは当初からあったが、この新たな基金募集と叙勲は正比例し、叙勲の対象は東京と関西での教育文化施設創立に物心両面で尽力してくれた財界人たちが中心となった。

さらに詩人劇作家でもある大使らしく、出張中も大学等の教育施設での講演会を欠かさない。それも大切な公務である。行き先は京都帝国大学など有名大学だけでなく、高等学校から、カトリック系の高等学校と女学校、夏期講座まで出かける。テーマはフランス語学修の勧めから日本文化観に亘った。

大使一人でも行く、半ば私的な遠距離の旅での行先は、京都と奈良が圧倒的に多い。京都は最初の訪日時1898年の訪問と、大使時代の1922年から1926年までを数えると、延べ10回の訪問である。特に1926年は12月に離任の挨拶と関西日仏学館創設の案件もあり、この年は実に合計4回の関西訪問である。

このように、公私にわたる関西方面、瀬戸内、九州方面の大規模な旅がまず顕著である。しかし、それに加えて、私的滞在と私的小旅行に於

いても、クローデルには特色がある。すなわち、夏は必ず避暑に赴き、それ以外の季節はちょっとした旅行を頻繁に行う。しかも行先としては、群を抜いて多いのが日光であり、それに箱根、伊豆方面がつづく。

ことに、日光は1909（明治42）年中禅寺湖畔の青木周蔵の別荘をフランス政府が大使館別荘として購入して以来、代々の大使や館員に多く利用されてきた。1914（大正3）年には9人家族のエミール・レニョー大使の時に3部屋増築された。湖畔には、ベルギー、イギリス、イタリアなど各国大使館別荘が並び、外交団の夏の避暑地となっていた。クローデルも1922年5月の別荘下見を皮切りに、頻繁に訪れた。初夏も、夏の盛りも、秋の紅葉も、それぞれの季節に於いて男体山を仰ぎ、中禅寺湖に接する別荘で過ごす¹⁷⁾。

その格別さは、次の手紙に象徴的に表される。初めての夏、友人の作曲家ミヨーに宛てたものである。

想像できる限りでもっとも美しい風景だ。
（…）私はここでは素晴らしい日本式の家
に住み、紙の扉を引き立て、だから完全に
森と空と自然に溶け込んでしまっている。
娘たちは大喜びで、昼間は湖にボートを漕
ぎだしたり、自転車に乗ったりしている。
（…）生活は麗しく、（…）パリへはあまり
早くには戻りたくないくらいだ⁶⁾。

家族の喜ぶ姿を見て自分も嬉しく思う父の姿があり、そして何といても「完全に森と空と自然に溶け込」むことが出来るのである。もちろん、執筆する場所ともなった。

日光に次ぐ行先が箱根であり、主に宮ノ下の富士屋ホテルに滞在する。さらに湘南、熱海、伊豆方面、富士五湖と、まるで富士山を眺める

ためのポイント探しのよう、周辺を小旅行する。実際、着任から離日まで、富士山が見える範囲の地域を通れば、彼の視線は必ず富士山の方角を向いた。箱根長尾峠からの威容、三津の島の間から見た姿に感動するだけでなく、1924年7月には富士登山を実行した。また、湘南、富士方面は、ドライブを楽しむのに適当な距離と行先であったからとも推測できる。もちろん、神奈川静岡方面だけでなく、成田山の正月、水戸偕楽園の梅、と千葉、茨城方面の近隣県も季節のポイントで訪れる。

こうした一泊の泊りがけの小旅行に行かないときは、今度は日帰りで散策を楽しむ。大宮の桜を見に出かけ、高尾山に登り、井の頭公園、多摩川、目黒、浅草の散策にでかける。気分転換を上手に図っていたと思われる。散策しないときは、能や歌舞伎の鑑賞、音楽会も予定に入れる。

ではこのように遠距離の大規模随行や視察から近くの散策まで繰り返すクローデルは、旅で何を見て、何を得たのか、次に考えたい。

第4章 眼差しによる異文化理解

第1節 伝統文化

クローデルは旅が始まると、それは出張でも私的旅行でも、そこに普段と違うものが見えると、嬉しくなり興味を持ち感動した。まことに素直な観察者であった。日本の何を見つめたのであろうか。何が好きであったのであろうか。

まず順当に挙げれば、日本の伝統文化を享受したかったといえよう。寺社、金色の障壁画、水墨画等である。初回の1898年の訪問時に際しても、日光、静岡、京都の寺社にて、こうした芸術品に目に留めている。そして、大使時代、京都には9回、奈良には5回訪れているだけあって、仏像、絵画とじかに接している。それも、まだ代替品展示の無い時代ゆえ、オリジナ

ルを見ている。その多くは、江戸の狩野派の作品で、金色障壁画を見て感動したことはよく知られている。実際、初回の中から二条城の黄金を基本色とする襖絵に注目し、西本願寺書院では襖絵を前に、金碧に描かれた秋の景色としてその美を高く評価した。大使時代にもこれらの書院を再訪している。さらに大覚寺の「紅白梅図」に感嘆し、植物の雄健さと金色の理想世界に日本の画家が描く神性を読み解く。あるいは、雪舟や牧谿の水墨画を見て、余白の役割と小さな生命の躍動を読み解く。終盤の1926年には、エリオ夫人と娘エレヌの京都見物に、二条城の松の絵だけでなく、知恩院方丈の狩野尚信筆鶴図を加えて、自らの金色障壁画鑑賞を仕上げたといってよい。そして、こうした鑑賞で得たものを講演で語り、エッセイにまとめ、さらには、『百扇帖』の短詩に昇華する。これらに関しては、これまでの研究でも言及されている。

しかし、こうしたいわば表向きの観察以外に、クローデルが好んで見たものがある。それは、車窓や甲板からの眺めと、高所からの俯瞰である。また、場所として好んだ土地がある。それは日光と富士山である。本章ではクローデルの旅での眼差しから彼のこだわりを探し、日本という異文化を理解したことを考える。

第2節 展開する風景

彼は旅をするとき、船ならば甲板からの景色をダイナミックに享受し、汽車ならば車窓を楽しむ。乗り物によって周りの景色が変化していくとき、素直に眼差しを向けた。

甲板で言えば、まずは日本着任の朝、横浜に向かう静岡沖の甲板から、朝日を浴びる富士山を仰ぎ、身を引き締めている。

大使時代は、瀬戸内海を船で巡ることが3度あった。24年11月メルラン総督随行情時、折から夕刻で丹青色の海と真っ赤な夕陽に感動する。

26年4月バザン提督と横浜を出港し宮島へ旅をするときは、太平洋は荒れていたが、瀬戸内海は好天に恵まれた。最後の随行乗艦となる26年9月のマルヌ号での旅では、高松、尾道、宮島、別府とまさに縦横無尽に忙しく瀬戸内海を渡り廻った。

車窓に向ける眼差しの鋭さは、そもそも初回の訪日から始まる。1898年に横浜に上陸し東京に汽車で向かう途中のことである。松林と富士の高嶺を目にしてそれを題材に散文詩『松』を書く。松が大気の圧力や海風に戦い曲がりくねりながらも空に向かってそそり立つのを人間に例えて賞賛し、その松のこずえを夕暮れの富士の峰に重ねて、神話世界のような力強さを描く。日光へ向かうときは、山の切通の地肌を見て、折からの悪天候の暗黒の雲と重ねて、散文詩『森の中の黄金の櫃』において家康の死後の世界の舞台としている。

大使時代も車窓への関心は同様である。富士山は、視線の最も気になる先であった。22年5月、京都から帰りの東海道の車窓からの富士山を皮切りに、通るたびに探すが、白眉のイメージを受けたのは、休暇帰国挨拶のために関西に行った帰り道、25年1月13日の早朝であった。バラ色に染まる冬の富士山山頂に感動し、これをもって、「日本滞在の記録を締めくくろう」とさえ言わせた¹²⁾。

この他、展開する風景に心を動かされている。例えば、仙台から東京へ向かう時の広々とした素晴らしい景色、東海道の晩秋に広がる黄金色の田園風景である。快晴のもとで光に溶け込む大地を「閉ざされた魔法の庭園」18)と呼び、夜ならば煌々とした満月のもとに広がる田野に目を留める。

また、車での移動、すなわちドライブに出かける時も、また徒歩による散策の時も、周囲に目を向ける。修善寺では海辺の断崖に感嘆し、

成田では山の中腹まで耕作される土地に目を留め、西山金山で森林に分け入れればその植物を観察した。箱根ではドライブ中に帽子を飛ばすこともあったが、火山と富士五湖を巡り、桜、桃、菜の花を楽しむ。真夏の三浦半島ドライブも楽しいし、小田原の先ではミカン畑を見やる。遠い旅先でも、果敢な探索と注視がつづく。2度訪れた別府では地獄めぐりを毎回実行するし、万田炭鉱に行けば地下400メートルの坑内に入る。そして雲仙の紅葉に感動する。瀬戸内の景勝地では、小さな港にうっとりする。

見るのは景色だけではない。瀬戸内での農民の踊りも、伊豆の漁師も、姑と嫁の姿も、鈴を鳴らして神を呼ぶ子供たちも、子供の凧上げのために走る母親も、記憶にとどめる。そして、懸命に働き自然を畏敬する日本人を発見する。

第3節 高所からの眺望

さらに、クローデルの旅の行動で特徴的なことは、高所である。大使は山を目指し、高地の神社に赴き、天守閣に登る。

東京では高尾山に22年12月と26年3月の二度登った。もちろん昭和2年開業のロープウェイはまだ設置されていなく、片道2時間程度の登山である。ちなみに26年、本国休暇から戻っての最初の散歩先が娘エレヌとの日曜日の高尾山だった。旅先でも、登った。鹿児島では桜島にさえ、途中までだが登った。

寺社に立ち寄る時、たとえ高いところでも登る。例えば23年12月、久能山東照宮では大変な「ジグザグ階段」を登り、家康が最初に祀られた宮を参拝する。黒塗りの社殿の威容と高見に「鷹の巣」¹⁰⁾と記す。これは浜辺に近い鳥居をスタートし、久能山を目指して急峻かつ折れ曲がる階段を上がってようやく黒塗りの宮に辿り着くという、まさに久能山東照宮の位置そのものを象徴するのだが、同時にフランス人にとっ

てはコートダジュール海岸の崖の上にある「鷹の巢」と呼ばれる村々をも想起させたに違いない。上からの東海の海の眺めはまさに地中海にも匹敵する。もう一つの例としては、24年11月初旬の日蓮宗の総本山久遠寺である。富士山の中腹を巡った旅の帰途、田原から富士川急流を下って身延で上陸し、久遠寺に詣でる。日蓮宗総本山の久遠寺では、「菩提梯」という三門から本堂へと続く287段の石段を上らなければならない。現在はエスカレーターを備えて便宜を図らねばならないほどの難関である。上に行くと、南アルプスを眺望し富士川が見下ろせる。この11月は末から2週間にわたる九州視察を控えているのだが、同じ月の初めにこれだけの強行軍の富士裾野巡りをすると、クロードルの体力と好奇心の旺盛さに驚くほかない。また、成田山新勝寺では、高台から盆地に美しく広がる小さな町を見おろす。関西では、伊勢神宮参拝時でさえ朝熊山に登頂し、比叡山延暦寺では、比叡山から琵琶湖の眺望を享受したことを指摘しておく。

高所と言えば、天守閣も当てはまる。関西視察の帰路、名古屋に寄る時はいつも、当時は天守閣を有していた名古屋離宮を見学した。そして、その天守閣最上階で格子窓の間から眼下に濃尾平野の視界を享受した¹¹⁾。

高所の中で、クロードルが好んだ極めつけは、日光と富士山であろう。

日光、ことに奥日光の中禅寺湖畔は大使館別荘がある避暑地だが、先に述べたように別荘を大変気に入って、何度も滞在した。避暑だけでなく箱根でも軽井沢でもよい。では、なぜ日光がこれほど多いのだろうか。それは、日光、ことに奥日光の中禅寺が日本の高所だからである。

中禅寺湖は海拔1296メートルで日本に於いて一番高所の湖である。奈良時代に男体山を開山

した勝道上人が発見した湖で、もともと江戸時代までは男体山登拝の修験者だけが通り、冬は住む人もいなかった。湖へは、二荒山神社・東照宮・輪王寺のある山内からは、そもそも修行の道なのだから、急峻な坂道を登らなければ辿りつけない。その坂は明治20年代になってようやく、現在の「いろは坂」の原形となるつづら折りの坂が開かれた程の、交通が極めて困難な坂である。中国の副領事時代にクロードルが日光に来た時も坂の途中であきらめ、湖には辿りつかなかった。車が通れるようになるのは、大正の終わりの時期で、クロードルが大使のころである。

この高所の湖畔にある別荘を、クロードルは大層気に入った。執筆にいそむると同時に、先のみよ宛の手紙にあるように、この地で自然に溶け込むことを実感する。高所に存在する自然に抱かれる毎日である。ここから、日本の修験者たちは、男体山を目指し、さらに上によじ登る。ゆえに、クロードルもよじ登る。

男体山には初めての夏に、そして白根山には、最後の年の夏に登る。ことに白根山では空の写真を撮り、自らも手を空にかざした。そして、詩「凡止」に謳われるように、時間が止まることに感動する¹⁹⁾。

もう一つの高所は、日本一の高所の富士山である。着任した朝から気になる存在であり、列車で通るたびに、あるいは船で沖を航行するたびに、いつもその姿を探していた。動くときだけでなく、三保の松原や伊豆半島からも感嘆して眺望していた。先にも触れたように、休暇帰国前、日本3年余の記録の締めくくりは、バラ色に染まった冬の富士山であった。

しかしその姿を仰ぐだけではない。実際に富士登山を24年7月に敢行した。時期としては、休暇ではあったが帰国が視野に入ってきたときである。この夏を逃すと登れないかもしれない。

7月5日土曜、8合目で一泊し、翌6日、日曜の朝、山頂に到達した。山頂から燃え上がる巨大な地平線を見る。まさに、眼下に日本を捉えたのである。

第4節 高みからの把握

では、このような日光や富士といった高所の意味は何であろうか。

もちろん、高所に行けば気分が良い。日常を離れることが出来る。気分転換ができる。大使という公的な身と、芸術家という狂気にも近い私的な身を一身に持つクローデルである。山に行けば、水平方向の俗世の大使の公務から離れることが出来る。垂直方向に上がり、自分を解放させて、執筆という芸術家の生き方をする。一つ身に、二つのベクトルを持つ人間にとって、この解放は貴重である。

しかし単なる気分転換に留まらない意味がある。作品から考えたい。来日1年足らずの1922年8月に日光で行った講演「日本の伝統、フランスの伝統」をもとにしたエッセイ、「日本人の心を訪れる眼差し」と、来日中に執筆した『繻子の靴』三日目第八場に出てくる「日本の島々」と呼ばれる詩句に、高所の意味を探したい。

まずこの講演では、来日早々にも関わらず、クローデルは日本人と富士山への深い理解を示している。日本人の特徴的な態度を「理知には到達しえぬ優越者をすなおに受け入れる」こと、すなわち「恭敬」と捉えたクローデルは、日本が「カミ（神）の国」と呼ばれるのも「完全な定義である」と考えた。そして風景という自然にカミは依り、その最大の「祭壇」が「富士山の巨大な塊」²⁰⁾であるとした。日本人は自然を畏敬し、その最大の祭壇が雄大な富士の山なのである。そして「日本の島々」において、その偉大な山は「偉大な天使」となって、「山々と森の連なりの上に、ひとときわ白く立ち、海を

見下ろす」²¹⁾ こととなる。

すなわち、日本人にとっての富士山は「畏敬」を抱く「カミ」の山であり、カトリックのクローデルにとってはひとときわ白く輝いて立ち、海を見下ろす偉大な「守護天使」の姿である。また、日光で言えば、そびえ立つのは頂きに二荒山神社奥宮の鎮座する男体山であり、その神話上のライバルである白根山である。日本人は山頂でお参りするが、カトリックのクローデルは白根の山頂で、さらなる上に伸びあがった。創造主のいる天上に向かって手をかざし、天の光を指の間に溢れさせたのである。そして永遠の静寂、最高の典礼歌を感じる。高所へ行けば行くほど、彼にとって神に近づくことになる。

そもそも、カトリックにとって垂直方向は天を目指す方向として大切である。ゆえに、『繻子の靴』二日目第六場で、狩人オリオン座でもある聖ヤコブは一人台詞を言う時ははっきりと天を示す。「私の方へと眼を上げるがよい。子供らよ。私の方へと」²²⁾。クローデルにとって、東照宮や金谷ホテルのある山内から坂道を超えて男体山を見上げれば、それは天に向かう垂直の道で、中禅寺湖は横線にあたり、まるで十字架を象徴していたかもしれない。彼は日記に記す。「山は神を前にした激しい喜びを意味する」²³⁾と。

そして高所に立つことは、神に近づくだけでなく、もう一つ、重要な意味があった。俯瞰である。眼差しによって見渡せば、そこを支配するという意味がある。『繻子の靴』の主人公、世界征服者（コンキスタドール）を目指すロドリゲスは、日本で囚われの身になり名古屋城の天守閣に幽閉されるのだが、そこから濃尾平野を見下ろして、逆に日本を支配したという。「何たる牢獄であったか！いやむしろ、私が日本四百余州を一望のもとに支配していた。（中略）ご天守の七十の窓から、わたしは、一手に掌握していた！」¹¹⁾と述べる。逆転の発想である。

だからこそ、クローデルは高所から遠くを俯瞰するのである。富士山から巨大な地平線も、白根山から中禅寺湖という海も、俯瞰する。『緋子の靴』の「日本の島々」において、富士山という白い偉大な天使は海を見下ろす。クローデルは印象的な言葉を日記に記す。24年11月「月からみえるものと地球から見えないものがある。眼差しのたった一瞥でくまなく世界のすべてを把握するには、地球を離れる必要がある」¹²⁾と。何と壮大な視点であろうか。高所では物足りない。もっと、もっと、高くに行かなければならない。地球の外から、「世界のすべてを把握する」のである。

思えば、旅をして地形を見たり、海を見たり、人々の営みの結果の田畑を見たり、植物を見たり、早朝や月影の下の車窓風景を見たりするのもすべて、一瞥を投げかけることによって、「世界のすべてを把握する」ことの小さなピースを一つ一つ埋めてくことになるのではないだろうか。車窓からならば速くたくさん把握できる。高所からならば、効率よく把握できるであろう。究極の高所、「地球を離れ」れば、一気に「一瞥で」把握できる。

そしてその把握とは、コンキスタドールならば世界支配であり、カトリック布教ならばロドリゲスの言うように「大地を広げ」「人間にとっては、天以外に壁も障壁も存在しない」²⁴⁾ことを示すことである。大使クローデルならば、それは日本理解である。旅をして一瞥を加えながら、異文化理解をしていくことである。カミの国で、自然への畏敬の念を持ち、謙虚さを保つ日本の心を知ることである。

だからこそ、第2次世界大戦末期に失いたくない国民として日本人を挙げ、その敗北後1945年8月30日にフィガロ紙に「さらば日本！」を執筆した。そこでは、軍部の残忍さを非難した

後、だからと言って「冬の夕空にくっきりと浮かび上がる富士山の姿が、この世の人の目に示されたもっとも崇高な光景の一つであることに変わりはない」と語り、旧約聖書の一句「主ハ諸国ノ民ヲ癒シ得ルモノトナサレタ」²⁵⁾で締めくくった。日本の風土の美しさと芸術の豊かさを讃えて、将来につなげることを明言したのが、わずか終戦2週間後のことで、元駐日フランス大使によるものであったことに驚くばかりである。

このようにクローデルは旅をして、地形を見て、人々を見て、営みの結果の田畑を見て、高見に登って、自分を解放させると同時に、日本に眼差しを投げ、日本を理解しようとし、また理解できたのである。

注

1) Paul Claudel, *Journal I (1904-1932)*, Bibliothèque de la Pléiade 205, Paris: Gallimard, 1968, p.501. (1921年1月10日) (以下、日記引用は、*Journal*と略し、引用者記。)

2) クローデルの旅程については以下の文献に依る。

Paul Claudel, *Les Agenda de Chine*, texte établi, présenté et annoté par Jacques Houriez, Coll. du Centre Jacques-Petit, L'Age d'Homme 1991.

Paul Claudel, *Journal I (1904-1932)*, Bibliothèque de la Pléiade 205, Paris: Gallimard, 1968.

Shinobu Chujo, *Chronologie de Paul Claudel au Japon*, avec son équipe T. Negishi, A. Ode, N. Shinonaga, Paris: Honoré Champion Editeur, 2012.

中條忍監修、大出敦、篠永宣孝、根岸徹郎編集『日本におけるポール・クローデル』クレス出版、2010年。

3) 渡辺守章『ポール・クローデル 劇的想像力の世界』中央公論社、昭和50年、343頁、465頁。

4) 日光直行については、渡辺守章、469-470頁。

なお、1898年時点ではB. Chamberlain and W. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan* (London: Murray) のうち、1894年4版が最新版である。同書はもともとアーネスト・サトウとホーズの共著で1881年に始まり、1891年3版からチェンバレンが引き継いだものである。

また、筆者の東照宮御文庫での調査の結果、明治31年6月1日と2日に大例祭が、3日に金幣祈禱祭が実際に執行されたことが、明らかになった。

5) *Journal*, p.531. 'Le Japon' と題された決意表明を1921年11月18日に記す。

6) *Correspondance Paul Claudel-Darius Milhaud, 1912-1953*, Cahiers Paul Claudel III, Paris : Gallimard, 1961, p.71.

7) *Journal*, p.581. 1923年3月26日。

8) *Journal*, p.603. 1923年7月2日から13日。

9) Paul Claudel, *A Travers les villes en flammes*, *Œuvres en prose*, Bibliothèque de la Pléiade 179, Paris : Gallimard, 1965, p.1144.

10) *Journal*, p.612. 1923年11月29日から12月。

11) Paul Claudel, *Le Soulier de satin*, Quatrième Journée, Scène II, *Théâtre II*, Bibliothèque de la Pléiade 73, Paris : Gallimard, 1965, p.869. 「ご天守の七十の窓から、わたしは、一手に掌握していた！」(『繻子の靴』4日目第2場。参考：渡辺守章訳、岩波文庫)。

Journal, p.612. 1923年12月、および p.716. 1926年5月。

12) *Journal*, p.649. 1924年11月。

13) *Journal*, p.656-657. 1925年1月22日。

14) *Journal*, p.727. 1926年8月2日。

15) *Journal*, p.737. 1926年10月24日。

16) *Journal*, p.756. 1927年1月30日31日。

17) フランス大使館中禅寺別荘および各国別荘については、以下を参照。

・井戸桂子「大使たちの日光」、*L'OISEAU NOIR:Revue d'études Claudéliennes* XV、2009年、1-34頁。

・同「ポール・クローデル大使と中禅寺別荘」『駒沢女子大学研究紀要』第十四号、2007年、25-48頁。

・同『碧い眼に映った日光』宇都宮・下野新聞社、2015年。

18) *Journal*, p.632. 1924年5月。

19) クローデルは白根山頂で神の光を浴び、湖を見下ろす。注14) 参照。

『百扇帖』の詩「凡止」「われ この山巔に来てみんとするもの そは 海にあらず あらゆるものの停止」(山内義雄訳)

Paul Claudel, *Cent Phrases pour Eventails*, *Œuvre poétique*, Bibliothèque de la Pléiade 125, Paris: Gallimard, 1967, p716.

20) Paul Claudel, "Un Regard sur l'âme japonais", *Œuvres en prose*, pp.1123-1125. 「日本人の心を訪れる眼差し」

21) Paul Claudel, «Les Iles du Japon» *Le Soulier de satin*, Troisième Journée, Scène VIII, *Théâtre II*, pp.813-814. (「日本の島々」『繻子の靴』3日目第8場)

22) Paul Claudel, *Le Soulier de satin*, Deuxième Journée, Scène VI, *Théâtre II*, p.752. (「日本の島々」『繻子の靴』2日目第6場)

23) *Journal*, p.742. 1926年11月。

24) Paul Claudel, *Le Soulier de satin*, Quatrième Journée, Scène VIII, *Théâtre II*, pp.919-920. (『繻子の靴』4日目第8場)

25) Paul Claudel, "Adieu, Japon !", *Œuvres en prose*, pp. 1152-1153. 「さらば、日本！」